東洋大学学術情報リポジトリ　Toyo University Repository for Academic Resources

吉田英厚『辨妄』について－明治期の崎門学派の一断面－

著者	白井 順
著者別名	SHIRAI Jun
雑誌名	東洋思想文化
巻	10
ページ	21-51
発行年	2023-03
URL	http://doi.org/10.34428/00014029

Creative Commons : 表示 - 非営利 - 改変禁止
http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/3.0/deed.ja

吉田英厚『辨妄』について—明治期の崎門学派の一断面—

白井　順

はじめに

筆者は拙稿「近代崎門学者の肖像—秋山罷斎」（『東洋思想文化』八号）において、桑名市立図書館所蔵秋山文庫の資料的価値と明治期の闇斎派研究における秋山罷斎の重要性を論述した。明治十年十月に設立の漢学塾二松学舎（現：二松学舎大学）が象徴的存在であるが、一八八七年（明治十七年）に西村茂樹によって日本講道会（明治二十年に日本弘道会に改称）が設立され、皇室尊重をうたい教育勅語を奉じて儒教的道徳教育をする動きも出始めた。同年、井上円了と内田周平らは東京湯島に哲学館を創立し、内田周平[1]は哲学館（現：東洋大学）中国哲学科で漢文の教鞭を執った。明治十六年六月に佐藤直方系統の石井一素（周庵）[2]・池田謙蔵（渓水）[3]は道学協会を創設し、奥平棲遅庵・山口菅山が創立した四為会を再興した。道学協会は、崎門諸先輩の墓石の修復と文献収集活動を行う団体として定期的に集会し、さらに同年十一月に道学協会雑誌を創刊し、会員に配布していた。そして明治二十四年それまで筆写本でのみ伝えられていた諸先輩の遺書『道学遺書』を活版で刊行する活動を始めた。

『道学遺書』の刊行に吉田英厚（号は為斎、字は士発）と舞田敦（号は脱斎、字は養浩）の二人が関与していたことは、梅沢芳男「明治時期の崎門学」（『増補山崎闇斎と其門流』所収）で紹介されたが、梅沢芳男および近藤啓

吾以降、明治時期における闇斎学派研究の専論は数えるほどしかない。一方、吉田・舞田両氏の師にあたる秋山罷斎については、糸賀国次郎「秋山罷斎先生」(『増補山崎闇斎と其学流』所収)以外には、前掲拙稿のみである。そこで筆者は、新資料として桑名市立図書館秋山文庫所蔵『東西雁魚』について紹介した。『東西雁魚』は秋山罷斎宛の書簡を年代順に編集したもので、そのなかに吉田英厚の書簡が残されていることを指摘した。

本年二月、ぺりかん社から清水則夫・三浦國雄共編『浅見絅斎全集稿本』が刊行され、この『稿本』について清水則夫氏が解説を附している。その解説が編者である舞田敦については現段階で一番詳しい内容だと思われる。この舞田敦と共に、秋山罷斎の門人であったのが吉田英厚である。吉田英厚については、三浦國雄氏による「大東《漢学》の一側面:市村理吉と四為斎文庫」[4]に詳しい。この論文で初めて市村理吉と姻戚関係にある吉田英厚と舞田敦という明治の二人の闇斎学者の素性が明らかになった。市村理吉(吉田英厚の甥)は、吉田英厚から受け継いだ書籍を大東文化大学に寄贈した人物である。大東文化大学図書館蔵市村理吉文庫には、秋山罷斎の著作が多く所蔵されている。例えば『秋山先生鉛筆詩歌箋集』(KC3491)、『秋山先生雑稿』(KC3329)、『秋山白賁堂先生和文集』(W2140)、『秋山先生易筆記類』(KB1466)、『秋山先生朱易衍義』(KB1466)、「白賁堂先生遺書」(KC3423)、「白賁堂先生文鈔」(KC3230)などである。さらに市村理吉の蔵書目録『四為斎文庫書目』(第七号昭和八年秋)には「秋山罷斎先生自叙傳」をはじめ、「温知余筆」「秋山先生修養講演録」「読語類(秋山先生)」『桑名前脩遺書』などが記録され、桑名市立中央図書館秋山文庫と大東文化大学図書館市村理吉文庫が不可分な関係にあることが分かるのである。

今回、市村理吉御子孫所蔵の吉田英厚の新たな資料を紹介し、吉田英厚の活動を検証するとともに研究資料として提供したい。この『辨妄』という新資料は、明治二十四年八月に吉田英厚が道学協会を退会する際に書かれたも

ので、吉田がどのような主張をして道学協会と決裂したのかを示す重要なものである。従来、『道学協会雑誌』及び『道学遺書』稟告で書かれた経緯のみしか知る資料がなく、当事者である吉田英厚側からの資料が全くないと考えられていた。これまで我々は「道学協会」という団体の体質に偏狭さを感じつつも、これが「崎門」なのだと梅沢及び道学協会の言い分が事実だと信じてきたが、この新資料によって真実が暴かれたと言えるだろう。そのほか、明治十六年の秋山罷斎が吉田へ宛てた書簡、秋山寒緑が吉田へ宛てた漢詩、吉田が舞田敦に宛てた書簡など、市村家御子孫が保管されていた貴重な資料も広く研究者に裨益すべくその一部を翻刻した。秋山罷斎と吉田英厚の交友について、具体的な研究は殆どなく、これらはどれも未開拓の吉田英厚という人物を知る重要な資料であるのみならず、今後多方面において研究資料としての価値を持つものである。まず明治十五年頃の秋山罷斎の状況を見てから、吉田が秋山に師事する頃の様子を紹介し、吉田と親友舞田脱斎の思想および道学協会の退会について述べていきたい。

明治十三~十五年ごろの秋山罷斎

秋山罷斎は嘉永二年（一八四九）十一月三日に桑名に生まれ、八歳の時に藩学に入る。十一歳のとき、大塚晩香より読書習字を学んだ。晩香私塾では加太邦憲[5]、小山正武[6]、町田鎌五郎[7]と机を並べた。十四歳のとき、江戸に行っていた父・白賁堂（蝸庵）が桑名に戻り、夜は家で父の指導を受けるようになった。十五歳で元服し、父に随行して江戸へ赴く。文久三年（一八六三）父の任に随行して大阪に行き、元治元年（一八六四）の春には京都に滞在していた。慶應元年（一八六五）、秋山罷斎は十七歳の時に桑名に帰り、同二年より藩黌の句読師の任にあったが、

糸賀によれば「当時学事改革の際なりし故、藩論と相容れずして、兄寒緑先生と共に固き反対論を唱えて黌を去るに至った」[8]とある。文政六年（一八二三）定信の子・定永の時、桑名藩の藩校・立教館は、広瀬蒙斎の門人・片山恒斎、加地紫山（片山恒斎の弟）・南合果堂、鈴木蝸庵（秋山罷斎の父・白賁堂）等を教授としていた。[9]『桑名藩治沿革大畧』によれば、学問を好み藩校を確立した松平定信が制定した教育方針が遵守され、経学・史学・漢学・書学・容儀学・舞学・音律学を基本の教科としていた。第十三代定敬（さだあき）の時代は佐幕派を通し、戊辰の役で朝廷から罪を問われ、[10]明治元～二年（一八六八～六九）にかけて立教館は閉校に追い込まれた。明治三年（一八七〇）五月、定敬は学校の規模を拡充するため伊賀町から吉之丸に移転し、[11]翌四年（一八七一）廃藩置県に伴い、同五年一月二十九日を以て完全に閉校となった。秋山罷斎はちょうど閉校に追い込まれた騒動のなか、句読師の任にあったのである。明治四年（一八七一）秋山罷斎二十三歳のとき、新しい政府のもとで兄の寒緑は文学館助教に、罷斎は同補教に任ぜられたが辞退した。この時、文学館の教授となった中には、藩学立教館の教授を務めた片山恒斎の孫・服部成美や終生の朋友である江間政発も含まれていた。同十三年には、自宅で教える傍ら、一色町の共学所の先生となり夜学教授の任にあった。[13]明治十年（一八七七）西南の役では、桑名より従軍志願者が四百五十名もおり、かなりの犠牲者を出した。秋山の友人江間も西南戦争後に桑名に戻り、秋山罷斎は彼の文集の序を記した。明治十四年（一八八一年）頃、秋山は桑名で勤王に関する文献を集め「観興文庫」を設立し、当時打ち捨てられた儒学文献を収集し松平定信（号は楽翁、異称は白河楽翁）の学問振興の志を守ろうとした。

秋山罷斎の友・江間政発（号は呰亭、字は子帥、後に養三に改める。別号は蘇洞。一八五一～一九一六）は、片山恒斎（一七九二～一八四九）の外孫である。藩黌に職を得るが、辞退して軍籍に入り台湾事変と西南の役に従軍し、西郷隆盛の屍を確かめたという。江間は眼疾により軍籍を退いたのち、桑名県書記として『桑名郡志』を編纂

した。江間政発は祖父の片山恒斎が『桑名志』（一八三五年）を著わしており、その血を継いだと言える。その後、滋賀県の役人となり、その後東京に出て農商務省に勤めるが数年でやめる。明治二十七年に渋沢栄一が立ち上げた徳川慶喜編纂所に入り幕末史資料を収集[14]、史官としての能力を発揮した。さらに白河楽翁の伝記も編纂し、大正五年八月二十四日に六十六歳で亡くなった。

江間政発が桑名にいたのは西南の従軍から戻り、『桑名郡志』編纂したあと滋賀県に行くまで、すなわち明治十年～十八年の間である。国会図書館所蔵『江間政発詩文稿』[15]は、巻頭に秋山罷斎の序文を載せる草稿集である。その文集には秋山へ寄せた詩文が収録され、江間は秋山罷斎と親しく交流していたことが裏付けられる。明治十一年に秋山罷斎はこの序文を記した。（注：子帥は江間のこと。断句は筆者による）

明治十年九州事起、江間子帥応徴、以警部補属新撰旅団西征焉、舩発神戸前一夕、與其陸軍曹長鈴木朝思拝湊河神社、黙祷久之時、天晴月明、気頗徴焉、朝思先得和歌一首、子帥亦編成一詩…（略）…数十篇、名曰枕戈集…（略）…余之與子帥交情非一日

当時秋山三十歳、江間は二十八歳である。戦争から帰京した友人を思う気持ちが見て取れる。この『詩文集』は明治十一年以後のものも追加編集していて、江間が明治十八年まで桑名にいたことを示している。明治十三年十月六日には、秋山は江間政発・井上叔輝（井上竹陵[16]）の三人で山へ遊びに行き、江間政発は「十月六日同秋子勿井叔輝山行次韵子勿」を作り、「漫遊半日」を詠む。子勿は秋山罷斎のことで、翌十四年に「四月初四日、同秋山子勿、井上叔輝等諸子、遊平古邨、径岩壺、詣多度社」などというように、頻繁に秋山と一緒に遊びに行っている。秋山は当時三十三歳、江間は三十一歳である。これらの詩文から、秋山と江間は、親しく活動を共にする間柄であったことが見て取れる。

明治十五年秋に秋山と江間は桑名藩儒・南合蘭室の子・南合果堂（名は琦、一七九八～一八六三）の遺稿を共同で編纂し、翌十六年三月に刊行した（図1）。これは非売品であり、明治二十六年に秋山が編纂した『桑名前脩遺書』に収録される「果堂先生遺稿」のもとになったものである。序文は秋山勝鳴すなわち白賁堂が記している。綴り糸綴じ、活版、縦18・5㎝、横13・2㎝、全十四丁、正誤表がある。表紙内側に「遺稿印刷同志諸君名字追記」として「芳賀鐐橘・柄田鑑次郎・丸山善昭・前田慧雲・鈴木良蔵・辻左右・水谷禹三郎」と記してある（図2）事が重要である。前田慧雲（恵雲、一八五五～一九三〇年、号は含潤、止舟斎）は桑名出身の浄土真宗本願寺派僧侶で、後に東洋大学長（明治三十九年）・龍谷大学（大正十一年）を務め、影響力を持った人物である。前田慧雲の父・覚了は片山恒斎に師事し、南合果堂と学んでいた。前田慧雲は秋山罷斎より一回り以上若いが、また彼も明治四年（一八七一年）十五歳にして興譲館改革に伴い句読師の手伝いをしていた。[17]興譲館は同年に四日市に設立された藩立学校で、前田慧雲は興譲館のあと、桑名の本統寺の句読師となった。彼は明治十年には広島の小学校教員となり、翌年には天台留学を果たし、再び桑名に戻ってくるのは明治十三年である。[18]明治十三年～十六年の間に、秋山罷斎・江間政発・前田慧雲の三名は共に桑名で交流をしていたのである。彼らが、地元の藩儒南合果堂の著作を残そうとしていたことは、大きな意味を持っているだろう。以上、秋山罷斎が崎門学統においては何の後ろ盾もない私淑であり、地元桑名で郷賢の顕彰活動をしていたことを確認した。次に、秋山罷斎と吉田英厚の交流についてみていきたい。

図1　『果堂遺稿』表紙
（筆者所蔵）

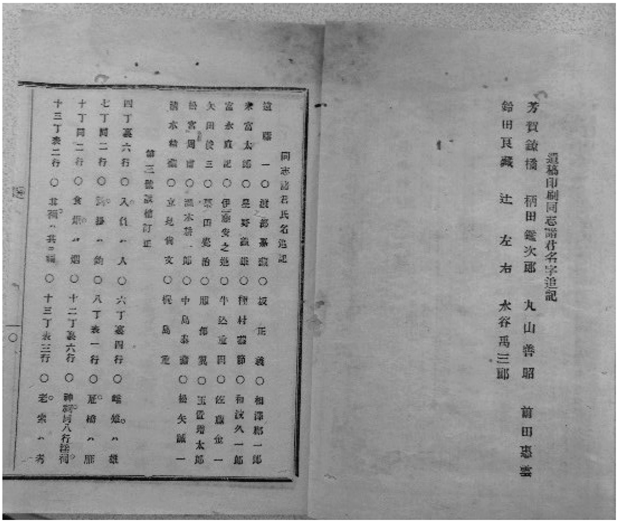

図2　『果堂遺稿』（筆者所蔵）

明治十五年、秋山罷斎と吉田英厚

明治十三年（一八八〇年）に舞田敦（一八六一～一九二二）は桑名在勤となり、逓信局で隔日勤務しながら、余暇には秋山罷斎に学ぶ生活をしていた。舞田は一色町で教えていた秋山罷斎と面識を得て入門した。その後に入門したのが吉田英厚（一八六三～一九四五）であるが、実は舞田より先に桑名にいたのは吉田であった。吉田英厚は東京出身で、なぜ桑名に来たのかについては現在のところ不明である。秋山と吉田が京都に遊んだのは、明治十五年壬午（一八八二年）夏五月のことで、秋山はその道中記を『西上日記』と題して残している。[19] 舞田は当時京都に勤めており、京都に秋山らを招いた。秋山は弟子の吉田英厚・竹内忍卿の二人を伴い、五月二日に桑名を出発し、五月三日に京都に到着した。五月四日には舞田敦の伯父で環翠楼の飯田氏の案内で京都市左京区黒谷の山崎闇斎・三宅尚斎の墓、翌五日には頼山陽の墓に詣でており、[20]『道学遺書』第一号所収「諸先輩墓所一覧」に関わる活動であることを窺わせる。

このとき吉田たちは、京都の船岡山へ行き、後光明天皇崩御の際に火葬中止を建言した奥（魚屋）八兵衛の事について話す。ちょうど偶然にもその日は京都の本屋で矢野玄道『正保野史』（文久二年刊）を入手し、天皇の火葬に対し号泣して建議した魚屋八兵衛のことが記載（『正保野史』六頁～七頁）を目にした。[21]『正保野史』を見ると、文久三年に川喜多真彦（一八一八～一八六八年[22]）が巻末に魚屋八兵衛に関して補遺を加えており、吉田士発はこれをみたことがわかる。矢野玄道（一八二三～一八八七年）は、平田篤胤の門人で皇典所の設置を上奏し、初代皇講究所の部長となった国学者である。秋山罷斎の父である白賁堂と生前に交友があった。余談になるが、秋山勝剛（寒

緑）が元治元年（一八六四年）に記した『東西遊行拙稿』（秋山文庫）にも魚屋八兵衛の記載がある。[23] このように『西上日記』によれば、闇斎だけでなく、十日には秋山罷斎の師・大塚晩香の墓所にも行っており、諸先輩たちの墓参というのが重要な意味を持っていたのである。

また「謀存于我観興文庫、余與士發喜而託之」[24] とあり、設立したばかりの「観興文庫」に架蔵する書籍を買い集めるため京都でも大阪でも積極的に書肆を歴訪していた。そして秋山と吉田・舞田は頼山陽に学んだ儒者・宮原節庵（一八〇六～一八八五年、備後尾道の人。名は龍、字は士淵・季泉、号は潜叟・易庵）にも面会した。宮原は京都で頼山陽の教えを広めた最後の門下生というべき人物で、明治十八年十月六日享年八十で歿した。『西上日記』によれば「先人之旧知」[25] とあり、秋山白賁堂の昌平黌時代からの知り合いで、罷斎はこの前年に遊学した際に交流があったようだ。宮原には『節庵遺稿』及び『栗郁先生詩稿』の著作があるが、秋山親子に関わる詩文は見当たらない。宮原と面会した日の夜、秋山は環翠楼の三字を揮毫し、この旅の経緯を次のように記した。（※断句は筆者による）

開窓、叡山突入、欄右則東山南、馳左則北山西、纏輝朝日映夕照、晴則好、雨則奇、或淡或濃、変幻不一、而要之、環楼皆翠也、此飯田君楼上之観、而所以有環翠之名也、初舞田君遊我郷、踰年西来京師、寓此楼、屢書以説其観、且促余一遊、夫西京余曾遊之地、而其山水皆旧知識也、俯読来書、仰思曾遊、頗有会心之処焉、已而今也與吉田君亦来寓此楼、朝夕晴雨、皆與此翠相対、果有（不）背其会心之処、而其奇観則殆有加焉

この旅のあと、同年十一月十八日に罷斎は再度吉田と共に京都・大阪へいく。秋山寒緑[26]は弟の罷斎と吉田に宛てて「送家弟機與吉田士発再遊西京」と題された漢詩を詠んでいる。

一年雙度決西遊、吹送寒風二等儔、里堠前蹄踏春尾、舟程後足發冬頭、白雲高仰名山景、紅葉遥探勝地秋、期

図3　秋山断の墓石（筆者撮影）

待錦嚢無限色、照盛帰到竹扉投　寒緑盲人

「一年雙度決西遊」とあるように、一年に二度も二人は一緒に京都・大阪旅行をしたわけで、この漢詩は『壬午西遊後記』を裏付けるものであるとともに、秋山罷斎と吉田英厚との深い信頼関係を示すものと言える。

　上述のように、明治十五年の京都の旅は、諸先輩方の墓参と観興文庫の図書収集という二つの目的を達成するために計画されたものであった。また後述する『道学遺書』第一号「諸先輩墓所一覧」には秋山貢堂先生墓として「桑名町新屋敷眞如寺」と明記されており、筆者が現在の眞如寺で墓石を探し、存在することを確認した（図３）。

明治十六年二月、吉田英厚と舞田敦

　明治十六年（癸未）吉田英厚は、名古屋の誓安院に寓居していた。誓安院は建中寺の脇（現：建中寺公園内）にあるが、以前は建中寺の山門近くにあった。そこに吉田は寓居し、細野要斎門下の学問に接した。秋山罷斎は、「遊吉田兄寓居誓安院」と題された七言絶句を送っている。期日を記していないが詩中に「躑躅」の語があるから、五月半ばであると思われ、十五年末から半年間、吉田は名古屋に滞在していたようだ。どうして名古屋だったのか

という点ははっきりしないが、市村家蔵理吉文書には明治十六年一月に罷斎に宛てた書簡の控えがある。この書簡には、吉田が名古屋崎門の細野要斎門下と交流したことによって、自分が秋山門下であることを感謝しているのが見て取れる。（※断句は筆者による。〇は不明瞭な字）

吉田士発遊名古屋、与書肆山口某相知、某嘗師事細野要斎翁、與聞崎門之学者、今者因士発寄贈此書於我桑名諸友、嗚呼、某之於我輩曾寄半面之知也、而有此贈者、其心蓋不在利而在義也、抑此書也、楠公伝家之忠訓、而爲之詞者〇赤心報国之所見先生也、嗚呼、此書也、雖一片紙、君臣大義之所存焉也、諸友其勿尋常謡曲視之而〇某之贈余、私有望於諸友焉

明治十六年一月　門人厚拝写

当時吉田は二十歳で、「桑名諸友」とあるのは、舞田ら秋山門下の人々を指している。この資料は、彼が崎門のなかで思想変遷があったことを示している。更に吉田は罷斎の兄・寒緑に宛てて書簡を送った。明治十六年新年に秋山寒緑（当時四十七歳頃）は吉田英厚に宛てて、次のように書いている。（※断句は筆者による）

復於吉田君士發足下、新年賀章、昨夕相達、弟機傳之剛、拝聴足下、昆玉無恙、志学勉励、欣賀何若焉、茅堂瓦全、請降高意、抑来諭書中、荒川氏学術云々、所謂隠居行其義者乎非乎、且所報永井某脩崎門之學、其人何想期後鴻、更待足下来面晤、篤甫士無皆然、不独剛昆弟也、前日所約送別蕪篇、労篤甫浄録了、聊以寄机下、幸讀旃、論雖拙以理勝為主、其於講習之際、不必無一助云、時下隆冬盛寒、萬自重、草々不具、明治十六年一月初六　寒緑秋山剛拝

この二通の書簡から、吉田は名古屋の崎門を代表する細野要斎門下と交流し、「崎門之学」とは何かと考えていたことが窺える。また「書中」とあるから、昨年末に吉田が寒緑に宛てて学問的質問をし、寒緑はそれに応え、自ら

の論著（蕪篇）を吉田に別送した。ここにいう「隠居行其義」とは、『論語』季氏篇の「隠居して以て其の志を求め、義を行ひて以て其の道を達す」を踏まえる。「荒川氏」とは荒川敬斎[27]（一八四〇～一九〇一年）、勤王の士として知られ、もとの名を尾崎良知という。尾藩主慶勝の側近として活躍し、常盤村（現：昭和区）に隠棲して塾を開き儒学を教えながら、徳川家の顧問も務めた。[28]「永井某」は三宅尚斎の学統を受け継ぐ尾張崎門の末裔細野要斎の弟子・永井以保のことである。永井以保と荒川良知は細野要斎の弟子で、崎門では三宅尚斎系統にある。秋山罷斎旧蔵書には永井以保から崎門文献を借りて写したものもある。[29]荒川の著書『敬斎遺稿』「與都築忍斎書」があり、都築忍斎に宛てた書簡の中に「吉田氏」と出てくる。この荒川氏の議論は親友舞田にも向けられた。市村理吉氏の遺族が保管している資料の中に吉田英厚が明治十六年（癸未：一八八三年）二月九日に書いた草稿と十日の清書があり、吉田英厚は舞田敦に宛てて次のように記す。（※断句は筆者による。）

向厚訪荒川氏、録其問答以贈大兄、録中及佐藤先生之事、大兄示厚曰、或云佐藤先生非受崎門正統者、且先生之学、知行不並行、不可能窺知云々、大兄雖不信腐儒之僻言、貴諭似有不穏、読来茫然、不知所言、嗚呼、不思大兄之言至此也。厚数日憂憤、今聊陳愚情、大兄諒焉、今夫大兄所学之学、異於先生之学乎、果異於先生之学、則非厚所学之学也、夫先生致力於静坐云々、静坐是積徳之基也、然以為類坐禅入定、或為近頓悟之学、是不知主静之為要、何足謂学者乎、実称学聖賢、而不循其明誨、何謂学聖賢乎、程朱常使学者静坐、則不静坐、非程朱之学也。非程朱之学、則非孔孟之学也。信孔孟之学、而疑程朱之学者、非信孔孟之学也。信程朱之学、而疑先生之学者、非信程朱之学矣。大兄果信斯道、則何於先生之学疑之、有果先生之学、則何信腐儒之僻言之有、厚所不解也矣。向祭山崎先生与三先生於環翠楼、疑而祭之、何感格之有、是欺天也矣。厚信大兄不欺天、然則当時信、而今者疑之乎、若至今而疑、則尚所信者非真信也矣。厚与大兄為友久矣、而自謂知厚莫如大兄、

知大兄莫如厚、而今如則向之所知非真知歟。嗚呼、大兄夙志斯学不疑、今聞腐儒之僻言、則当一言以斥之也。抑亦至此何、蓋下筆之誤歟。抑厚之錯解歟。熟味所呈佐藤先生之学術筆記、而信其真受正統、則為斯道之幸甚、鄙意如此、不審高明以為如何、切待再報　癸未二月十日

右の引用は清書を翻刻したものであるが、草稿には前日の日付で「舞田養浩大兄」と宛先を記入してあり、舞田敦（養浩）に送るものであることが分かる。佐藤直方派の学問を崎門と認めないという荒川氏に対して、舞田がすぐさま反論しなかったことに吉田は愕然とした。舞田のことを理解していると思っていたが、そうではなかったのかという気持ちにさせられたのである。舞田のこの態度は、大正二年六月、舞田敦が『浅見絅斎全集』の編纂を企画し全集編纂会を設立するが、それと関係する可能性もある。清水則夫氏によれば、舞田は明治二十三年から既に『浅見絅斎全集』編纂のための活動を始めていた。上述のように、秋山罷斎は佐藤直方系列ではあるが、私淑で特定の道統を持たない。このころから、舞田は佐藤直方よりも浅見絅斎に共感していた可能性があり、舞田敦の思想変遷を知る資料としても非常に重要な書簡である。

明治十六年三月一日、秋山寒緑は再び吉田に書簡を送った。この時、寒緑は『近思録』道体篇を読み、アドバイスを与えた。（※断句は筆者による。）

辱芳簡拝読、船程無恙、達尾張、欣賀何若、茅舎依旧瓦全、幸降意抑、剛読近思録道体條、稍過其半、今昨所読到、聊書以寄於足下、請留意読焉

明道先生曰、天地生物、各無不足之理、常思天下君臣父子兄弟夫婦、有多少不尽分処。按物字雖兼人物、而所以主則在人耳、須看各無不足之理、與有多少不尽分処、反照天人不相似之意思、宇宙間幾能尽得其分、一旨三歎、真有余味、其警人也極切矣。常思字宜熟玩、学者不可不察也。他期後鴻、時下春寒、萬自重、草々不宣

明治十六年三月一日

再啓年七夕、芳簡昨昏相達拝読。訪書肆秋田、購得諸経籍、欣賀欣賀、首中二生于今無音信、唯有士無来訪耳、噫、寒緑に無事に尾張に着いたことを伝えたことがわかる。

三月二日

「辱芳簡拝読、船程無恙、達尾張」とあるので、吉田が二月中に桑名に来て、桑名の七里の渡から尾張に戻り、寒緑に無事に尾張に着いたことを伝えたことがわかる。秋山寒緑は『近思録』の「天地生物各無不足之理、常思天下君臣父子兄弟夫婦有多少不尽分処」の朱子注では一切触れていない「常思」に対してこれを「熟玩」せよという一歩踏み込んだ解釈をする。「後鴻」と言うように、寒緑は吉田に対して期待する気持ちを表している。また追伸から、吉田は前年に罷斎と訪れた京都・大阪だけでなく名古屋でも書籍を買い集め、文献的な研鑽も積んでいたことが分かる。これらの資料から、十五年十一月末の二度目の秋山罷斎との旅行のあと、約半年間、吉田は名古屋にいたことがわかる。吉田は秋山門下でありながら、敢えて佐藤直方系ではない崎門の学問を学ぶことによって自分の学問の幅を拡げようとしたことが窺えるのである。

明治二十四年吉田英厚の道学協会退会

明治十六年六月、道学協会の発起人は修治会の鶴岡精斎・鵜沢遂庵、日曜会の池田謙蔵・吉川祐之・宇高丹斎・木村利武および忍藩の村田焼屋・芳賀観斎・横須賀の鈴木忠兵衛で、いずれも三上是庵の高足たちだった。[30] 明治十六年十一月「道学協会雑誌」が刊行され、編集人は石井音吉である。道学協会創立と同時に上総に支部会が設置され、南総支会が設立され今井松順が支会長となった。梅沢芳男「明治時代の崎門学―道学協会を中心として」に

よれば、「道学協会雑誌七十三号発刊の後、幸か不幸か秋山罷斎門下の吉田英厚・舞田脱斎の二氏が偶々道学協会と同盟して雑誌を発刊し、与に崎門学の研究に貢献したいと云うことで申し込んで来た[31]」とある。明治二十三年六月十五日に第一再興協議会が開かれ、吉田・舞田が参加して改正規則の草案の修正が行われ、第二回再興協議会が同月二十五日に開催、そして七月二十七日に改正規則確定会が開かれた。同年十一月二日には第二確定会が開かれ、且つ仮事務所（神田区小川町十番地好文堂内）が設けられた。道学協会にとっては第七十三号で廃刊を予定していたところに、彼ら二人が加入したことによって規則を改正し『道学遺書』を刊行することとなり、再興の運びとなったのである。そして明治二十三年七月、『道学遺書』の発行所を舞田脱斎（東京小石川区小日向台町一丁目六十六番地）・発行人を池田謙蔵（芝区三田綱町一番地）とした。吉田の弟・吉田英実も加入し、編集兼印刷人として名前と住所（東京市四谷区左門町七十六番地）がある。

明治二十四年、吉田英厚は東京の四谷区左門町に住んでいた。同年一月十一日、吉田邸で道学協会の総会が開催され、会員十一名・賛成員五名総計十六名が参加した。当時の会員総数は百四十三名である。ここで投票により幹事が池田謙蔵、主記が吉田英厚、主計が舞田敦に決定した。評議員は石井音吉・芳賀高重・吉川祐之・内藤久米吉・吉田英実（吉田英厚の弟）である。参加メンバー及び評議員を見れば、道学協会は佐藤直方系の稲葉黙斎門下の三上是庵・石井周庵を中心とした団体であることは明らかである。吉田・舞田は直方系統としては奥平棲遅庵に連なる秋山罷斎門下ではあるけれども、先述してきたように罷斎は道統のない私淑にすぎず、上総道学を中心とした道統を重んじる閉鎖的な人々とうまくいかないのは当然であった。

吉田・舞田が入会後、約一年で退会することになるのは、明治二十四年三月刊行『道学遺書』の序文と「諸先輩方墓所一覧」に起因する。墓所一覧に崎門ではない藤原惺窩・林羅山・中村惕斎・室鳩巣が含まれており、道学協

会会員内から不満の声が上がったのである。吉田・舞田は「今の時代は広く朱門の学者は大同団結すべき」[32]と考えていた。梅沢氏は「而して両者の間に数々深刻なる書簡の往復があった。それは今悉く吾人の手にあるが、一々読んでゆくと互いに微言零語人の肺腑を刺すものがある」[33]と述べていて、彼らは何度も書簡による議論を重ね、埋められない溝を確認し合った。

ここでその度重なる議論の一部分である新資料を紹介したい。二人の退会の原因は、表向きに言われるような墓所の問題だけではなかった。吉田・舞田が編纂に携わった『道学遺書』初集巻一と『道学協会雑誌』第七十四号、これら二つには実は秋山罷斎が関わっている。『道学遺書』第六号附録『道学協会雑誌』第七十四号（八月二十日刊行）には、寄書として「秋山二先生御手帖」および吉田英厚による「記罷斎之東遊之事」を掲載した。「秋山二先生」とは秋山寒緑と秋山罷斎のことである。「記罷斎之東遊之事」は同年四月十六日に秋山罷斎が眼病治療のために東京にきたときの漢詩と記録を掲載した。[34]もう一方、明治二十四年三月『道学遺書』初集巻一には、本編である「孤松全稿」の前に「刊道学遺書序」という文を掲げ、署名は「道学協会員謹序」となっている。この文章は、秋山罷斎が書いたもので、秋山自身は「自分は会員ではない」ということで署名を拒み、吉田が苦肉の策でしたことだった。これについて上総道学の人々が批判したのである。結論から言うと、吉田は上総道学の一部の人の主張は秋山罷斎に対して無礼であると考えており、そのために和解できず脱会に至ったのである。

『養痾日程』は、舞田・吉田の求めに応じて秋山罷斎の眼病治療の目的で企画された旅の記録ある。明治二十四年四月十六日から約一か月に亙る秋山罷斎の東京滞在の記録である。『養痾日程』の四月二十日には「此日道学遺書第一号刊成。被贈其一部」とあり、自身が書いた「刊道学遺書序」を登載する『道学遺書』[35]を秋山罷斎は受け取った。その時、罷斎は「今日よりは流れ尽くせし隅田川　その水くきの跡をとどめて」と発刊を祝して一句読んだ。

この滞在記を見ると、十八日に初めて内田周平と面会しただけでなく、道学協会の宇高正郎（丹斎、横浜の人）と会ったり吉田双堂・山内氏と会ったり様々な人々との交流している。他にも、罷斎は当時まだ珍しい牛肉を食べさせる牛店に行ったり、自動鉄道に乗って「尤も壮快」と感想を残していたり、『養痾日程』はガチガチの崎門学者というステレオタイプを裏切る罷斎の人間性が見えておもしろい。

その新資料は市村理吉氏御遺族が保管していた資料の中の『辨妄』（全五枚）と題された草稿である。明治二十四年八月二十日に刊行された『道学協会雑誌』七十四号巻末稟告部分に「今之ヲ公ニシ其一二ノ妄ヲ辨ジ以テ吾儕ノ決心ヲ示ス」と吉田が書いた内容に関わる草稿であることが明らかである。長文ではあるが、翻刻をした（後掲参照）。『辨妄』の欄外書入には「弁序文」「規則ノ始メニ勅語ヲ掲ケ会員トアルハ妙ナリ」「前ニ序ヲ託シ后排斥責其無礼」「総会ニ決シタル則チ会員ヨリ乞ヒシ所以ナリ」「道学ノ標準」「程朱ノ宗旨ト崎門先輩宗旨ト曰一ナルヲ論ズ」「神道ヲ論ス崎門ノ神道学者ヲ奈何トス」「地位ニ依リテ学術ヲ信スルノ愚ヲ弁ズ」「太守ヲ先生ト称セシの弁」「余輩ヲ異端視スルを論ズ」等、各段の主張の要旨を記す（後掲翻刻参照）。その吉田は、最初に経緯を次のように主張する。「尾嵜先生」は尾崎久愷[36]（明治二十五年八月没）のことで、尾嵜氏は道学協会発起人のメンバーの一人であった。尾崎先生が『道学遺書』の序文執筆を辞退したことによって、「諸君ニ斗リテ我罷斎先生函丈ニ乞フコトトナレリ」と会員の了承を得たのにも関わらず、その署名が「道学協会謹序」であったことが批判されたのである。[37]そして吉田は「前ニ序ヲ託シ后排斥責其無礼」の部分では、最も厳しく秋山罷斎に対する無礼を責めている。「総会ニ決シタリ則チ会員ヨリ乞ヒシ所以候」とあり、道学者としてあるまじき態度、と吉田は主張する。つまり吉田は正しい手続きを経たのにも関わらず、難癖をつけたその態度に激怒したのであった。

次に「崎門」と「道学」の認識について吉田は反論した。事前に吉田は「先輩ト云フハ我邦ノ孔孟程朱ヲ標的ト

シテ斯学ニ功労アル先輩ハ其門ノ如何ヲ論セズ[38]」と編集方針を示していた。「先輩トハ崎門ニ限ルト何ゾ其見解ノ狭隘ナル[39]」と石井周庵らの見解を受け入れることはできなかった。『道学協会雑誌』第七十四号本文末尾「秋山罷斎先生與舞田養浩吉田士発手帖曰惕斎翁講学筆記一二摘出如左（…）先輩墓所一覧ヲ編シ惕斎中村先生ヲ掲グルニ及ンデ論者往々私意ヲ狹ミ先生ヲ罵詈痛議スルコト至ラザルナシ」とあり、特に中村惕斎に対して猛烈な攻撃があった。『道学協会雑誌』第七十四号（八月二十日刊行）稟告部分末尾には次のようにある。

明治二十四年八月三日東京三田綱町池田邸ニ於テ本会役員会ヲ開キ吾儕編集委員等ハ向ニ藤林中室四先生及崎門外ノ先輩ヲ掲載セシ件ニ付評議員石井音吉君外旧会員諸老ヨリ吾儕ヲ以テ学術趣向相南北シ道学ヲ乱ルノ徒トナシ又南総支会会員十四名ヨリハ中村惕斎ヲ取消スベシ且其主意貫徹セザルニ於テハ退会スベシト申出ラレタレドモ吾儕ハ再興規則ノ趣旨ヲ遵奉シ事務ヲ執行シ今ヤ旧会員ト見解ヲ異ニシ吾儕ヲ以テ道学ヲ乱ルノ徒トセラルルニ於テハ到底本会ニ安ンズルヲ得ズ故ニ当日辞職ヲ申出デタリ

「藤林中室四先生」（藤原惺窩・林羅山・中村惕斎・室鳩巣の四人）を墓所一覧に含めるという認識が問題だと、南総支会員から中村惕斎らの取消を激しく要求されていた。吉田兄弟・舞田の辞職宣言の後も臨時会議が開かれた。『道学遺書』第八号（明治二十四年十一月）稟告には池田謙蔵が次のように載せている。

九月二十日更ニ臨時総会ヲ自宅ニ開キシガ浦和ヨリハ村田譲吉君南総支会ヨリ今井松順君等来会セラレテ相共ニ商議セラレタレドモ舞田吉田両氏当初ノ意見敢テ動カス斯ニ於テ愚見ヲ提出シ吉田舞田二子ニ暫ク此墓所一覧記載ノコトヲ中止シ主客ノ論ハ之ヲ学術問題ニ付シ広ク之ヲ会員諸君ト討議センコトヲ欲望シ而シテ愚見ノアル所ハ予テ本会ニ於テ刊行セル小川真砂第十一道御餞文講義ニシテ足レリト因リテ之ヲ朗読シテ我輩ノ陳述ニ換ヘタリ然レドモ両氏等持論ヲ主張シ竟ニ議論相合ハスシテ解散スルニ至レリ斯ニ於テ二子ノ辞職ハ最早止

ヲ得サル場合ナレドモ尚ホ二子ノ去ラルルヲ欲セサルモノハ熱心ニ道学遺書刊行ニ勤勉尽力スルモノ未タ他ニ二子ノ如キモノヲ見ズ因リテ十月七日自宅ニ二子ト相会シ中止ノコトヲ談シタレドモ終ニ其事調ハス退会シテ事務ヲ引継クコトヲ約シテ別ルルニ至レリ

池田が「主客ノ論ハ之ヲ学術問題ニ付シ」と片付けた中村惕斎の『示蒙句解』は『漢籍国字解全書』（明治四十二年刊）にも採録され、明治には様々な形で刊行され読まれた朱子学の基本書であった。吉田は後掲する『辨妄』で室鳩巣『大学章句新疏』と『太極図述』を挙げ、石井らが自己を「道学」の主とし、中村惕斎と室鳩巣らを道学として認めないことに対し、分かり合えないことを悟った。吉田は石井周庵の見識に対して「道学者の俗人」と厳しい言葉を浴びせ、自らを「余輩ハ石井君ノ道学ヲ乱スノ徒トナリ」と宣言した。そして前掲の池田謙蔵が「墓所一覧の掲載中止を提案した」ことに対して、吉田は「墓所保存ト墓祭トヲ混同シタル会員アリ可笑」と一蹴した。このように『辨妄』と『道学遺書』第八号稟告を比べてみると、池田謙蔵が幹事でありながら、小川真砂の講義を朗読しただけで、解決のために何も動かなかったことも、吉田の退会を決定的なものにした一因と言えよう。

　その後、吉田・舞田は明治二十七年頃まで秋山罷斎が進めていた『桑名前修遺書』の編纂に携わった。二十七年中には、辞令によって吉田は朝鮮に渡り、二十八年正月は朝鮮で迎えた。舞田も山梨勤務となり、脱然書院を開くが、その後朝鮮全州勤務となり日本を離れた。市村家御子孫が保存する資料の中には、明治二十八年乙未事変で混乱した朝鮮全州から、帰国した吉田を労う秋山寒緑と罷斎の書簡もある。明治二十八年秋十一月、楠本正翼は針生から大阪への旅に出て『東遊日暦』を記した。それによれば、十二月一日に吉田士発に面会し、五日には再度吉田を訪問、八日に吉田の勤務先である電信局を訪ね、そこから楠本正翼は奈良へ向かった。吉田英厚は「大阪市西区立売堀南通り六丁目八番地」の市村宅（市村理吉の父宅）に居り、当時大阪で暮らしていた。同三十一年には小田

原駐在を命ぜられ、明治三十二年楠本正翼の『東遊日暦』に記録された住所では、吉田英厚の住所は「水戸市南町」となっている。また『東遊日暦』備忘録には「吉田英厚、字士發、学秋山罷斎。明治二十七年以職訪朝鮮、在京城求李退渓全集不得、僅得年譜及続集初一冊云、年譜較之書抄所載甚詳、又心経及近思録集註…」とある。それに続けて「土津霊社言行録　写本二冊、玉山講義附録師説　写本、二程造道論　写本一冊、退渓年譜　朝鮮本一冊、退渓文集続集初一冊　朝鮮本、右吉田厚氏所持」とある。このように、吉田英厚は朝鮮、大阪、その後小田原、水戸と転勤になるが、秋山罷斎とは一貫して書面による交流を続けた。『東西雁魚』（桑名市立図書館所蔵）に吉田英厚による罷斎宛の書簡が残っている。

さいごに

以上のように、『道学協会雑誌』『道学遺書』に関わる吉田・舞田の退会は、秋山罷斎に無礼を働いたことが許せなかったというのが真相である。しかしながら、公刊された退会の経緯には、秋山罷斎の名が全くなく、「諸先輩墓所一覧」に藤原惺窩・林羅山・中村惕斎・室鳩巣が含まれていたことに起因したことになっている。そこには、上総道学が自らの主張を正当化するために秋山への無礼を隠蔽した意図が感じられる。昭和以降、梅沢芳男ら上総道学の喧伝の力が強かったため、現在に至るまでその経緯に疑いの目が向けられることはなかったが、この吉田の『辨妄』の翻刻によって、石井周庵をはじめとする上総道学一派のセクト主義が白日の下にさらされたと言えよう。吉田は退会後、道学協会と交流をしている形跡は見られないが、今後梅沢芳男が残した文書などの調査が進めば、新しい資料が出てくる可能性もある。桑名市立図書館所蔵『東西雁魚』所収の明治四十二年の吉田英厚書簡には「薩

藩程朱学系譜略」と題した図があり、吉田が退会後もずっと闇斎派と道学の問題を意識していたことが分かる。秋山罷斎が進めていた『桑名前脩遺書』の編纂を手伝った後、吉田は明治二十七年末までに日清戦争で混迷にあった朝鮮に赴任し、秋山のもとを去るが書簡による交流は絶え間なく続いた。同二十八年一月秋山罷斎は「先賢遺冊自韓山」と詠んで送った。この「先賢遺冊」とは『李退渓全集』のことで、吉田は李退渓の資料を秋山に送っていた。この後、吉田英厚は事業家として活動し、表向きには崎門学者としての姿を確認することはできない。北海道の農場に投資し、海外貿易に携わり「日本商会」の一員として、神戸の御影に住んでいたこともある。ガス会社を起業して、明治四十二年英米に派遣され、四十四年に再び欧州へ出張するなど、英厚は機械を考案して特許を取って事業を拡大していた。

一方、吉田が道学協会と袂を別ったあと、石井周庵と交流のあった谷干城（土佐南学の谷秦山の子孫）が内田周平を高く評価し、池田謙蔵は内田周平を道学協会へ引き入れた。道学協会は内田周平という広告塔を得たのである。明治四十年十月に山崎闇斎に正四位追贈の命があり、内田・池田が主となって同年十二月十五日に贈位の祭典を東京大神宮で行った。その後明治四十二年八月、内田周平が山崎闇斎の祠堂碑を記し[41]、京都で祭祀を行った。「闇斎山崎先生祠堂碑」の発企は谷干城、協賛は池田謙蔵である。大正期になって内田周平が崎門を代表する人物となっていき、その門人・近藤啓吾が崎門学派研究を推進し、石井周庵の系列の上総道学は梅沢が率いるようになった。同時期に、桑名では秋山を顕彰する「桑名尚徳會」と、篤好書院同窓会（白賁書院同窓会）が設立されたが、秋山の学問は地元の有志と門人以外には顧みられることがなくなっていった。吉田英厚は、大正十五年十一月から昭和二年八月にかけて『白賁書院書庫目録』（第一次秋山文庫目録）を編纂した。[42] 吉田英厚の妹（操）の長男である市村理吉（士勝）は桑名に赴き、昭和四年十一月秋山罷斎が亡くなる直前、罷斎の講義録を筆写し、同年十一月十七

日これらを白賁書院に納めた。その一部が現在大東文化大学にある秋山罷斎の著作[43]である。これら市村理吉と白賁書院の関係については、また別の稿で述べる予定である。

吉田英厚『辨妄』翻刻

序文ニ姓名ヲ記セスシテ会員謹序トセシハ既ニ之レヲ先キニ諸君ニ向テ対ヘタルモ猶

諸君ハ覚メス再ヒ辨説スルノ場合ニ会セリ

何ヲ以テ之レニ向テ不満足タルカ抑モ此序文ハ尾嵜先生ニ託セシモ老ノ為メニ辞セシ於是諸君ニ斗リテ我　罷斎先生函丈ニ乞フコトトナレリ然ルニ函丈示セン云余ハ会員ニアラズ其任ニ当ルヲ得ズト再三乞フモ依然タリ既ニ此ニ至リシナレバ無已欠序ノ心組ナリシモ実ニ其失体ヲ憂ヒテ然ル刊行ノ期ニ迫リタレバ既ニ諸君ニ斗リシ以上ナレバ決然会員ニ代リテ又請シ所以ナリ然ルニ　函丈ノ自署ナキハ前書会員ニアラザレバ採筆ヲ乞ヒシモ道学ニ志スモノノ遺書ヲ読ムノ精神乃チ遺書ニ入ルノ境域希聖ノ二字ヲ以テセラレタレバ此ニ十分ト云フベシ諸君ニシテ希聖ノ精神ナクシテ何ヲ以テ全稿ヲ読ントスルカ而シテ其意ヲ代表スルニ於テ何ノ不可アラン若シ会員一同ノ承諾ナキ故不可トセラル事ナレバ此ハ統斗論ニシテ今日ノ事勢ナル故諸君モ満足セラルベシ乍併余輩ハ大ニ諸君ノ所謂怪異ニ堪ヘサルナリ何トナレバ規則ノ初メニ諸君ト共ニ奉載シテ　勅語ヲ掲ケシナリ署シテ云臣道学協会員等敬識トナシタリ諸君ハ未タ之ニ心付サルカ掲示ノコトハ恐ラクハ勿論ナラン而シテ其付言ニ至リテハ如何ナル考ヲ有セラルカ事体固大ナリ所係亦大ナリ余ハ之レヲ筆シテ未タ諸君ノ印証ヲ得サルナリ諸君ノ意モ亦恐ラクハ之ニ外ナラサルベシ然リ而シテ諸君モ満足セラレシナラン未タ其評語ヲ聞カザルナリ未ダ妄論者アルヲ聞カザルナリ而シテ論者ハ之レ

ヲ咎ムルトセバ果シテ何ト書セントスルカ

我師ハ会員ニアラズ諸君ハ既ニ序文ヲ乞ハントス諸君ハ何ヲ苦テ至于今如此呶々スルカ余ハ云ハントス論者ハ実ニ礼ヲ知ラサルモノトス前ハ之レヲ乞ヒ今ハ之ヲ排ス三歳ノ子モ如此無礼ノ言ハ為スヲ屑トセサルベシ且ツ崎門以外ニ道学者ナシトノ論ニシテ我師ニ乞序前ニシテ托シ今ニシテハ嗚呼承知シテ呉レサレバヨカリシニトノ意カ可笑ノ甚ノミナラズ無礼此ニ至リテ極処ニ達ス

抑モ如此ノコト道学者ト任スルノ人ノ言トシテ自カラ満足スルカ

先輩トハ崎門先輩ノミト故ニ以外ノ人ハ可刪道学遺書中ニ編入スルヘキモノニアラズ決然除キ去ラザレバ本会ノ名称ヲ背戻スト天与人以仁義礼智之性孔孟程朱立教以示万世道学者之出豈特崎門而已哉ト云ハンノミ若シ夫レ崎門ノ外道学ナシト云ナレバ余ハ十分弁ゼサルベカラズ道ナルモノハ果シテ何処ニアルト云フカ道ハ天下公共底ノモノナリ而シテ人々衆理ヲ備ヘテ万事ニ応スルモノナレハ抑モ学理ニ於テ崎門ト限リタルカ誤ナリ余ハ程朱ニ従テ崎門先輩ヲ信スルノミ程朱ヲ棄テ崎門先輩ニ只依ルハ好マサル所ナリ語ヲ転セバ程朱ニ従テ失アルモ程朱背イテ得アルヲ欲セスト云コトナリ崎門ノ宗旨ニシテ程朱ノ宗旨ト異ナルナラバ崎門先輩ハ信スルニ足ラズト云ハンノミ然ルニ先輩ハ程朱ノ宗旨ヲ宗旨トス故ニ余ハ深ク信スルノミ論者ノ伝来スル所ノ学ナルモノハ果シテ何ノ学カ理ニ背キテ崎門先輩ニ従ハント言フカ姫嶋講義ニ学問ノ不振卑卜小トニ由ルナリ孤松先生ノ憂ヘラルル如ク論者ノ言ノ如クナレバ卑小ナリト言ハサルヲ得ズ之レヲ以テ崎門先輩ノ学系ヲ継クトハ可笑ノ甚シキモノナリ」故ニ緒言ニ山崎先生而下其人不乏モ余輩ノ所措ヲ以テ苦ンテ求メタトノ言矛盾ニアラサルヲ知ラン理ニ於テ其内外ヲ言フヘキモノニアラズ程朱ノ書ニヨリテ得ラレタル人ナレバ道学者ナレバ崎門ノ外ニモアリ内外ノ区別ハ必用ナシ一覧中ニ載不載ニテ分明ナラン

抑モ崎門ノ内ニモ𤏋俗人多カルベシ序文ニハ崎門トハナシ朱子学者ト云テモ孔孟ヲ本尊ニスルトテ自カラ区別アリ一覧ニヨリテ知ルベシ兎角門派ノ弊ヨリシテ見ル事毎ニ錯ス異学ハ無論程朱ヲ標準トシテ少シノ差ニテ同席ナラヌトハ小ナルノ考ニシテ厳ナルニアラズシテ卑小ナル見ナリ

程朱ノ外少シ宛ノ差アルヘシ之レヲ以テ丸テ一人ヲ蔽フハ不可ナリ全体ニ付テ見ルヘシ序文ニハ特ニ山崎先生ノ学筋ヲ伝エントハナシ門派ノ見ヨリハ或ハ左見アルヘシ室先生一人ヲ是非スルハ未也道学ノ一門ニ篭ムヘキヤ否ヤヲ第一ニ見ルヘシ孤松先生ハ口ヲ極メテ室先生ヲ称ス然ルニ其伝流ヲ汲ムト自ラ言テ室先生ヲ排斥スルハ論者ハ自ラ不知孤松先生ヲ排斥スルニアラズヤ若シ果シテ不然トセバ此一言ノミ孤松先生ノ言ヲ不信ト云ウニアルカ」論者ハ云フ道学協会ハ山崎先生ノ学ヲ伝ヘントスルノ会ナリト実ニ此会ハ如此モノニアラズ程朱ノ学ヲ伝ヘントスルノ協会ナリ程朱ニ醇乎タル先輩ノ学ヲ伝ヘントスルノ会ナリ若シ山崎先生ノ学ヲ伝ヘテ程朱ノ学ヲ伝フルモノニアラズトセバ神道学者モ此会ニ含蓄スルモノトスルカ余ハ云ハン神道ハ関所破ナリト先キニ論者ハ室先生ヲ目シテ関所破リナリト可笑ノ甚シキモノナリ孤松先生ハ大学新疏ノ後篇ニ跋シテ云ク

・朱子ノ疏以来ノ文字ニシテ吾邦開闢以来ノ一人ナリ吾党ノ后生一物アリテ先生ヲカロカロシク思フハ以ノ外ナリ徒ニ不求益ト云フベシ

・駿台雑話ハ神武以来　筆記ナリ

・羅山先生誠ニ我邦闔（開）国以来ノ大儒ナリ此後仁斎カ妄説出天下ニ公行スル比鳩巣先生出大学新疏ヲ著ハシ彼輩ノ妄説不弁トモ百年論定レリ然レハ此二家ハ今日ニ在リテ尊重スヘキコト此二家ヲ首倡トナシテ実学ノ徒ヲ開クニ何モ憚リナシサレバ二家ハ吾儕浪人儒者ノ依帰タルヘシ但シ二家未十分ナラザルコトアラバ亦大家ニ商量スヘシ却テ忠臣ト云フベシ

・大学新疏、大極図述アルニテモ鳩巣先生ハ文字訓詁之学ニアラズ

夫レ大学ハ道学ノ規模ノ大ヲ極メ節目ノ詳ナルヲ尽クスノ書ニアラズヤ而シテ大極図ハ道学ノ精微蘊奥ヲ発揮セラレタル書ニアラズヤ之レヲ解リ或ハ少差ナキヲ保セズト雖モ孤松先生ハ既ニ如是ニ称賛セラレタリ論者云フ鳩巣先生ノ大学ハ文義ヲ解カレタルニ止マレリト文義ニヨラズシテ道ニ深ク入ルモノアルカ文義ヲ離レテ妙旨アル処アルカ加之孤松先生ハ常ニ云フ佐藤先生ヲ佐藤子ト其他子ヲ以テ称セラルルモノアリト雖ドモ室先生ヲ以テ毎ニ子ヲ以テ同ク称セラルヲ見テモ少シハ注意アルヘシ一例ヲ見ス

論者云中室先生ノ世ニ大功アルコトヲ聞カズト

見聞ノ卑小ナルニ驚ク論者ハ孤松先生学ヲ汲ムモノニアラスヤ孤松全稿ハ一閲セシコトハナキモノト考フ中村先生ノ事ハ当時通交不頻或ハ不可知室先生ノ事ニ至リテハ既ニ前言スルコトニテ分明ナラン抑識監ナクシテ徒ニ先輩ヲ盲信スルモノハ野父ノ釈迦ヲ信スルノ一般ノ観タリ藤林二家ハ世ニ大功アレドモ闇斎佐藤二先生不必称之至我父師屡称之不称者是以見其挺世豪傑之気与風門高峻屡称之者是以見其能量敦厚之象与教術真意云々惣テ功ノ有無ハ其学ト人トヲ知テ后ニ語ルベシ濫リニ妄言ヲナシテ自己ノ門風退モ敗ルナカレ余以為ラク論者ハ余輩ヲ以テ究格ノ至ラサルヨリシテ中室二先生ヲ信スト既ニ七十四号雑誌ニ中村先生ノ伝ヲ掲ケ語抄ヲ示ス而シテ未ダ門派ノ弊見蔽ハレ未タ覚ラズトハ究格ノ路ヲ不知ノ人ナラン況ンヤ孤松全稿ニ於テ十分分明ナル室先生ヲ疑フ如キ何ヲ以テ究格トスルカ其人其学全体少過何如ト不察セシテ徒ニ之レヲ外ニスルハ門流ヲ尊フヲ知リテ道理ヲ学フヲ知ラサルノ徒タルノミ乃チ道学者ノ俗人ナルカ元来地位ニ依リテ之ヲ信ルハ学理ノ許スヘカラサルモノナルコトヲ記憶セドモ苟モ鞭策録ノ序ヲ一閲セハ少シハ其弊ヲ覚ルヘシ佐藤子云至門専其学徒阿所好安排造為瞞人自誣而無所得而后已矣是正有古之所患者而近世為尤甚

墓所保存ト墓祭トヲ混同シタル会員アリ可笑古ニアロウガナカロウガ無構若シナケレバ保存ナルコトハ義起スヘシ
礼ハ古ニ泥ムナカレトハ此ヲ云フナリ
我師事終徳諸言ノ冒頭ニ墓者所以托形寧体也豈可忽哉云々墓ト冒頭ニ書キ出スコトハ無理ト此レハ読者ノ不文ヨリ
文字ヲ不解モノナリ
道不同不相為謀注不同如善悪邪正之類
南瓜ノ喩アリ妙絶余ハ口ヲ開キテ閉ツル能ハサリシ内藤新宿ハ南瓜ノ名物人間ニハ道理ノ名物道学ハ人間ノ品撰ス
ルコトカ崎門内ニハ天ノ賜アリ以外ニハ其幸ナキカ若シ反之仁義忠孝ハ人間ノ名物トセハ何ゾ少々ナル門専其学ニ
センヤ余輩ヲ目シテ道学ヲ乱ルノ徒ナシタリ実ニ石井君ノ見ヨリ見レバ或ハ然ランカ乍然余ハ此ニ二字ヲ加エント
ス余輩ハ石井君ノ道学ヲ乱スノ徒トナリ
太守ヲ先生ト云ハレシコト先例ナシ義起スヘカラサルモノヲ義起スルナカレト是レ何ノ言ゾヤ大守ナル資額於余輩
何有ラン
余輩ノ尊信スルモノ道学先生故尊信スルモノニ一例ヲ以テ示サンカ子思ノ以位〇於我モノト云コトナリ其意ヲ推セ
ハ子思ノ眼中爵位ナキモノナリ孤松先生答〇〇某書余ノ奴婢ノ贄ヲ講云ヒシコトハ朋友通財ノ義アラバ放テ無妨ト
云コトヲ記憶セザルカ之レニ因テ見レバ先生ト称スルハ義起ニアラズシテ例アルニ足下等ガ前例ナシト云フコトニ
ヨリ例ナケレバ義起ニテヨメルヘシト云フコトニ足下等ハ主張セズトモヨキコトヲ主張スル好事家ナルカナ」 然
ルニ兎角ノ議論ハ扨置余輩ヲ以テ異端視セラル此事タル他門先ヲ掲ケタルヨリ起ル然ラハ中室二先生モ道学ヲ乱ル
ノ徒ト異端視スソノ異端ヲ口ヲ極メテ称賛セラルニ默斎先生ヲ異端視セサルヲ怪ムルナリ如是モノハ余ハ明言ス実
ニ道学ヲ乱スノ徒ナリト然ルニ過日一二友石井氏ヲ問フ、 曰此等ノ事ハ抑末ナリ協会ハ到底其刊行ノ責ニ堪ヘサル

ヘシ永続ハ思止マリクレヨト私意モ亦甚シキモノト云フベシ余ハ決然此等ノ徒ト共ニ与ニスルヲ欲セス来会諸君公平ノ眼之レヲ光スアラバ幸甚々々

※本稿の作成に際して、貴重な資料をご提供下さった市村家の皆様に深く感謝申し上げます。
※本研究（の一部）は、科研費補助金（21K0055）の助成を受けたものである。
※〇の箇所は不明瞭な字。

1 内田周平の事跡については、拾穂書屋主人紹宇近藤啓吾『内田遠湖先生を偲ぶ』（『古書先賢』昭和五十七年六月・私家版に所収）を参照した。
2 名は一素（かつもと）。音吉と称した。上総清名幸谷の人。三上是庵に師事し、明治十六年に東京で時習学舎を開き、全国の崎門学者を糾合して道学協会の創設を呼びかけた。同志は池田謙蔵、芳賀高重、村田譲吉、吉川祐之、石川堅次郎、鈴木忠兵衛、宇高正郎、鵜沢専蔵、鶴岡精斎、木村利武など。
3 諱は一実、通称は謙蔵、号は渓水。伊予松山の人。石井周庵と同じく三上是庵に学ぶ。著書は『道議哲学図解』（道学館版、明治三三年刊）。
4 『大東文化大学漢学会誌』五十一号、三三～五八頁、二〇一二年
5 秋山と親しい。拙稿を参照。
6 秋山が墓碑を書く。拙稿を参照。

7 戊辰の役（一八六八年）の鯨波の激戦において、二十二才の立見鑑三郎が率いた雷神隊が大活躍した。その立見の実弟で、鯨波の戦いでは致人隊で従軍し寒河江にて戦死した。
8 糸賀国次郎「秋山罷斎先生」『増補山崎闇斎と其門流』、一六三頁。
9 近藤 杢編、平岡 潤校補『桑名市史（本編）』（桑名市教育委員会、一九八七年刊）、四九二頁の立教館沿革を参照。また同書五〇一頁「立教館教授学頭一覧表」によれば、安政四年より明治二年まで秋山白賁堂が教授を務め、明治二年〜三年は教授不在で学頭に秋山白賁堂の長男・秋山直太郎（寒緑）が務めた。
10 明治二年に朝廷は桑名藩に反逆の首謀者を出すように命じ、森陳明が全藩に代わって出頭し、江戸深川邸で自刃した。桑名十念寺の森陳明の墓誌を江間政発が書いた（明治八年十月高松徳重撰）。明治十年の深川霊巌寺の森陳明の墓誌銘は、秋山と江間の親友である小山正武が撰している。
11 『日本教育史資料一』文部省編（富山房、一九〇三年刊）、八九頁の立教館　沿革要略には「文政六年越中守松平定永ヲ伊勢桑名ニ移サル、ニ当リ旧領主松平下総守ノ旧貫ニ仍リ学校ヲ伊賀町ニ設ク」とある。
12 服部成美については『江間政発詩文稿』「陸軍軍曹服部成美招魂碑銘」を参照した。服部成美は明治十年の西南の役に従軍し負傷、十二年に二十六歳にして久留米病院で亡くなり、筑後に葬られた。江間政発と服部成美はいとこ同士である。
13 糸賀国次郎「秋山罷斎先生」『増補山崎闇斎と其門流』、一六三頁。
14 『維新史料編纂会講演速記録』（マツノ書店）に収録されている。
15 『江間政発詩文稿』の編集は次のような順に並んでいる。「枕戈集、草稿（丁丑以来※明治十年）悪詩稿、己卯西遊草稿（※明治十二年）、臥吟行酔録、松暈存稿（庚辰・辛巳・壬午※明治十三・十四・十五年）、鄙稿（壬午※明治十五年）、訪古遊草二号（辛未十月十九日※明治四年）、遊帰雑詩、訪古遊草、乙酉存稿（※明治十八年）、戊子存稿（※明治二十一年）、堕涙稿、賜告土産、草稿」。「乙酉存稿」以下は滋賀県警察本署の原稿用紙や板心に滋賀県と書かれた原稿用紙を使用している。これらの資料から、江間が明治十八年の後半から滋賀県で勤めていたことが分かる。

16 諱は政文、字は子彬、号は竹陵、称は右仲。井上裘山の養子で、文学館教授。明治三十年四月五日享年七十八。『楽翁と教育』（九華堂）附録碑文集「竹陵井上先生墓表」、二〇頁を参照。

17 龍渓章雄「前田慧雲の漢学塾修学時代」（『真宗学』一一九・一二〇合併号、二〇〇九年）を参照。

18 龍渓章雄「前田慧雲の学問・思想形成過程をめぐる一考察」『真宗学』一一七号、文末年譜を参照。

19『西上日記』の書誌については拙稿を参照。

20『西上日記』「四日（略）飯田丈人與養浩至黒谷、謁闇斎山崎夫子尚斎三宅先生之墓」、「五日　晴　又與三子歴訪書肆訪渡辺中精。午後更観智恩院至丸山、吊山陽頼翁之墓」とある。

21『西上日記』「前日與士發過舟岡山也。山下有除地榜曰、後陽成天皇御火所及拜而去。談及留火化者魚屋八兵衛之事、士發欲得其墓所而無由知之、其明過一書肆見正保野史者閲之有其事示之士發士發即購之、今日偶然閲之其墓所及其居宅詳載之、與士發語嘆其奇然未知其塋域大光寺者在何地（所）會鴨溪下楼忽帰報曰、所謂大光寺在西北数丁有断碑、云、是八兵衛之墓、丸太町富小路於久、八郎兵衛者其裔也」

22 川喜多真彦は、管宗次『京大坂の文人―幕末・明治』（和泉書院、八九～九五頁）によると、倒幕運動の赤報隊の記録方参謀のメンバーであった。川喜多は平田篤胤の門人である六人部是香に学び、『花洛名勝図会東山之部』『紀年大成』『近世三十六名家集』など京都を知る重要な資料を書き著している。

23『東西遊行拙稿』魚屋八兵衛「中古典章非所宜、拋身極諫涙雙垂、朝廷深感忠誠切、為建葬埋萬世基」と詠み、脇に罷斎が朱で批語を記している。

24『西上日記』十六日に「五条橋東訪尺家堀内某店頭掲額、曰、山崎闇斎先生所製周尺中村惕斎先生所製古尺家、又伝漢土歴代尺度係平田翁校定、嚮余之在郷也、養浩馳書報之。謀存于我観興文庫、我與士発喜而託之」とある。また十九日の箇所にも「與士発養浩歴覧書肆」とあり、京都・大坂で精力的に書肆を廻っている。

25『西上日記』「二十日　晴　訪宮原翁於間之町御池之家。備後尾道人学山陽頼翁久垂帷于京師。先人之旧知、而余前年遊

学之次、屢随先人至其居、翁迎接語旧説、今翁年七十又八矍鑠無恙、呈紙一包、翁酬以其所書近作一葉、閑談良久而辞帰」

26 秋山寒緑は四年の在東京生活で、麹渓書院に学び、明治三十年（一八九七年）六月四日に六十一歳で亡くなった。寒緑と内田周平は交流があり、寒緑没後に内田は『擬古楽府』を出版したが、そこにはこの詩文は含まれていない。

27 荒川敬斎（尾崎良知）の蔵書は蓬左文庫に所蔵されている（百九十部千九百六点）。国立国会図書館所蔵の『敬斎遺稿』を参照した。

28 『愛知県勤王家伝』（大正十三年、東京芸備社）八頁および『尾張武人物語』（昭和十七年、清正堂書房）二九四頁を参照。

29 桑名市立図書館秋山文庫所蔵『続崎門経義輯編』巻末に「右朱易衍義筆記一巻尾府内庫図書道学資講巻之三百七所収明治二十一年就尾張永井君借之謄写之業三月上旬終四月初八日」とある。

30 梅沢芳男『稲葉黙斎先生と南総の道学』南総崎門学会、昭和六十年、一〇九頁を参照。

31 同、一一二頁。

32 同、一一三頁。

33 同、一一四頁。

34 この秋山罷斎の東遊を纏めたものが『養痾日程』であり、桑名市立図書館秋山文庫の手抄本や楠本文庫（筆写本）、そして大東文化大学市川文庫には雅声社から刊行したものもある。

35 桑名市立図書館秋山文庫七四五‐六（桑名秋山家蔵の印、巻末に道学協会の印がある）

36 尾崎久愷は、秋山久敬とともに松山藩の記録「松山叢談」を編纂した（明治十一年）。三上是庵は慶應三年に郷里の松山藩に帰り、藩士の教育に携わった。三上の帰郷に随行したのが石井一素で、いわば尾寄と石井は同門である。

37 『道学協会雑誌』第七十四号（八月二十日刊行）稟告「論者往々全会員ノ承諾ヲ得ズシテ会員謹序ト書シタルハ不都合ナリ」

38 『道学協会雑誌』第七十四号（八月二十日刊行）稟告

39 『道学協会雑誌』第七十四号（八月二十日刊行）稟告

40 千葉文書館（船橋市）の鎌倉家文書（四四三五点）には、梅沢芳男から譲り受けた、上総道学に関する刊本・写本・稿本等である。山武市の山口家文書（五九二五点）・山口（節）家文書（三七八五点）も、同じく梅沢の旧蔵書を中心とした文書群である。これらの資料群の中に吉田英厚の退会に関連する書簡が残されていると思われる。

41 亀山聿三編『近代先哲碑文集』第四十六集「闇斎山崎先生祠堂碑」、夢硯堂、一九七六年。また同文は内田周平『崎学闡明文略』（昭和十三年、谷門精舎）にも収録されている。

42 吉田英厚　編『白賁書院書庫目録（秋山文庫）』「白賁書院書庫目録一巻、起功于大正十五年十二月、昭和二年八月成、是皆奉罷斎先生之旨、使市村士勝書之、先生終焉之後五日謹納之于書院書庫、後世愛護而無失墜云　昭和四年十一月十七日吉田英厚四為生」

43 例えば大東文化大学図書館市村理吉文庫所蔵『白賁先生罷斎先生秋山先生雑稿』（KC3329）巻末には「昭和四年十一月二十二日写了於桑名白賁書院市村理吉造所記」とある。